

Studies on Holonomic Quantum Fields

—— 線型微分方程式の変形理論 ——

京大数理研 佐藤 幹夫

三輪 哲二

神保 道夫

§ 1. Riemann の問題 と Schlesinger 方程式

リーマン球面  $\mathbb{P}_\mathbb{C}^1$  上に  $n+1$  個の点  $a_0 = \infty, a_1, \dots, a_n$  を取る。  $L_\infty, L_1, \dots, L_n$  を任意の  $m \times m$  行列とする。この時次の問題を考える。

(#1)  $\mathbb{P}_\mathbb{C}^1$  上の多価解析函数を成分とする  $m \times m$  行列  $Y(x)$  で、次の性質を満たすものを構成せよ。

i)  $x \neq a_0, \dots, a_n$  では  $Y(x)$  は正則で  $\det Y(x) \neq 0$

ii)  $a_\nu$  ( $\nu = 1, \dots, n$ ) の近傍では  $\det \bar{\Phi}_\nu(x) \neq 0$  なる正則函数の行列が存在して

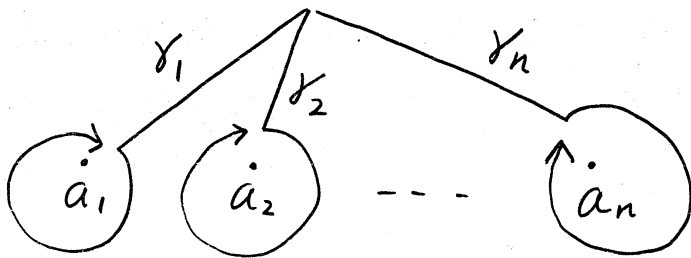
$$Y(x) = \bar{\Phi}_\nu(x) (x - a_\nu)^{-L_\nu}$$

iii)  $\infty$  の近傍では  $\det \bar{\Phi}_\infty(\infty) \neq 0$  なる正則函数の

行列が存在して  $Y(x) = \Phi_\infty(x) x^{L_\infty}$  //

(#1) は常に解を持つわけではない。実際、次のような  $\mathbb{P}_\mathbb{C} - \{a_0, \dots, a_n\}$  の基本群の生成元  $\gamma_\nu$  を取り、 $\gamma_\nu$  に沿って  $Y(x)$  を解析接続したものを  $\gamma_\nu Y(x)$  と表わすならば

$\gamma_\nu Y(x) = Y(x) M_\nu$   $M_\nu = e^{2\pi i L_\nu}$  となる。



この時  $\gamma_1 \dots \gamma_n = \gamma_\infty$  は  $\infty$  をまわる道であり、

$\gamma_\infty Y(x) = Y(x) M_\infty$   $M_\infty = e^{2\pi i L_\infty}$

となるから、条件として

$$M_1 \dots M_n M_\infty = e^{2\pi i L_1} \dots e^{2\pi i L_n} e^{2\pi i L_\infty} = 1$$

が従う。

さらに、 $A_\nu = -\Phi_\nu(a_\nu) L_\nu \Phi_\nu(a_\nu)^{-1}$  とおくと

$Y(x)$  は次の Fuchs 型方程式を満たしている。

$$\frac{dY(x)}{dx} = \sum_{\nu=1}^n \frac{A_\nu}{x-a_\nu} Y(x)$$

無限遠での展開から  $A_\infty = -\Phi_\infty(\infty)L_\infty\Phi_\infty(\infty)^{-1}$   
 とした時  $\sum_{\nu=1}^n A_\nu + A_\infty = 0$ , 従って  
 $\text{trace}\left(\sum_{\nu=1}^n L_\nu + L_\infty\right) = 0$  となる。(Fuchsの関係式)

以上の二条件を課しても, (#1)の解が存在する事は保証されないが, 今ひとつの固定された  $(L_1, \dots, L_n, L_\infty)$  の組に対して,  $Y(x)$  が存在したとする。  $\Phi_\infty(\infty) = I$  と正規化すれば, unique になるから, それを  $(x, a_1, \dots, a_n)$  の函数として考えると, 次の線型微分方程式系を満たす。すなわち  $d$  を  $(x, a_1, \dots, a_n)$  についての外微分として

$$(\#_2) \quad dY = \left( \sum_{\nu=1}^n \frac{A_\nu}{x-a_\nu} d(x-a_\nu) \right) Y$$

(#2)の右辺の係数として現われる 1 form の行列を  $\Omega$  と書くと

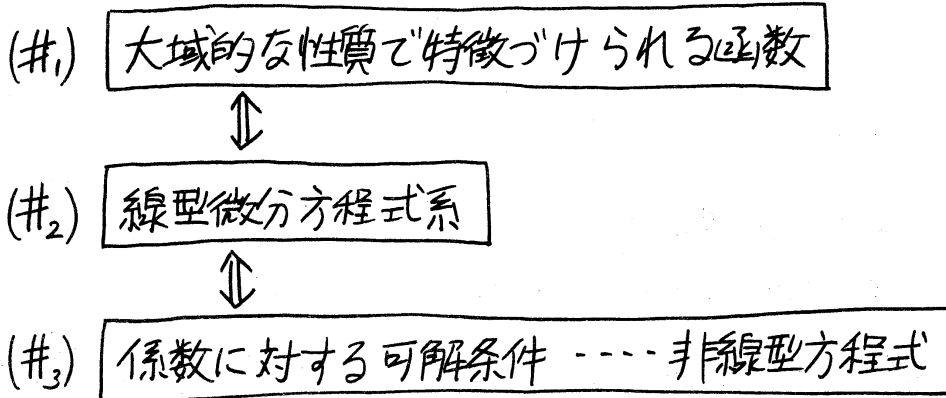
$$0 = d^2Y = (d\Omega - \Omega \wedge \Omega)Y$$

従って  $d\Omega = \Omega \wedge \Omega$  となる。これは, (#2)の可解条件であり, 具体的には  $A_\nu$  に対する次のような非線型方程式系になる。

$$(\#_3) \quad dA_\nu = - \sum_{\mu \neq \nu} [A_\nu, A_\mu] \frac{d(a_\nu - a_\mu)}{a_\nu - a_\mu}$$

(#<sub>3</sub>) は (#<sub>2</sub>) の大域的な性質であるモノドロミーを保ったまま、分岐点  $a_1, \dots, a_n$  を動かした時に、係数行列  $A_1, \dots, A_n$  の満たすべき関係を与えている。(Schlesinger [1])

以上を図式的に示すと次のようになる。



本稿の主題のひとつは、(#<sub>1</sub>) のもうひとつ前に

(#<sub>0</sub>) オペレーター表示

という新しい見方がある事を示す事であり、もうひとつは、上の (#<sub>0</sub>) ~ (#<sub>3</sub>) に対応するものを、2次元 ディラック方程式の解について考えたら何が得られるかを明らかにする事である。

実際には、我々はここに述べた順序とは逆に、物理における2次元格子の問題から出発してここまでたどりついたのであって、それについては [3] を見られたい。

## §2. クリフォード群

前節で述べた“オペレーター表示”のオペレーターとは、クリフォード代数あるいはクリフォード群の元のことである。この節では有限次元の場合にそれを説明する。

クリフォード群

$W$  を  $N$ 次元複素ベクトル空間,  $\langle w, w' \rangle$  を  $W$  上の非退化対称な内積とする。

$A(W)$  を  $\{w \in W\}$  から生成され, 基本関係式  $ww' + w'w = \langle w, w' \rangle$  を持つ代数とする。(クリフォード代数。)  $A(W)$  の自己同型  $\varepsilon$  で  $\varepsilon(w) = -w$  ( $w \in W$ ) となるものが unique に決まる。

$G(W) = \{g \in A(W) \mid \exists g^{-1} gW\varepsilon(g)^{-1} = W\}$  をクリフォード群という。

—例—  $w \in W$  が  $w^2 = \frac{1}{2}\langle w, w \rangle \neq 0$  を満たせば  $w^{-1} = \frac{1}{w^2}w$  であり

$$\begin{aligned} ww\varepsilon(w)^{-1} &= -\frac{1}{w^2}(ww'w) = \frac{-1}{w^2}w(\langle w', w \rangle - ww') \\ &= \frac{-1}{w^2}w\langle w', w \rangle + w' = w' - \frac{2\langle w', w \rangle}{\langle w, w \rangle}w \end{aligned}$$

よ、て  $w \in G(W)$  となる。 //

$$T_g : \begin{array}{ccc} W & \longrightarrow & W \\ \downarrow & & \downarrow \\ w & \longmapsto & gw \varepsilon(g)^{-1} \end{array} \quad \text{という線型変換は}$$

$W$  の内積を保つ。すなわち  $T_g$  は 直交群  $O(W)$  に属する。さらに次の exact sequence が成り立つ。

$$1 \longrightarrow GL(1, \mathbb{C}) \longrightarrow G(W) \longrightarrow O(W) \longrightarrow 1$$

すなわち、 $g \in G(W)$  は定数倍を除いて、 $T_g$  によ、て決まる。

### ノルム写像

$W$  上の bilinear form  $\begin{array}{ccc} W \times W & \longrightarrow & \mathbb{C} \\ \downarrow & & \downarrow \\ (w, w') & \longmapsto & \langle ww' \rangle \end{array}$  で

$$\langle ww' \rangle + \langle w'w \rangle = \langle w, w' \rangle$$

を満たすものを考える。すると、 $A(W)$  から  $W$  上の外積代数  $\Lambda(W)$  へのベクトル空間としての同型が次のように決まる。これをノルム写像という。

$$N_r : A(W) \longrightarrow \Lambda(W)$$

$$N_r(1) = 1$$

$$N_r(w_1 \cdots w_k) = (w_1 + \delta_{w_1}) N_r(w_2 \cdots w_k)$$

但し  $\delta_w : \Lambda(W) \longrightarrow \Lambda(W)$  は次式で与えられる。  

$$\delta_w(w_1 \cdots w_\ell) = \langle w w_1 \rangle w_2 \cdots w_\ell - \langle w w_2 \rangle w_1 w_3 \cdots w_\ell + \cdots + (-)^{\ell-1} \langle w w_\ell \rangle w_1 \cdots w_{\ell-1}$$

—例—  $N_r(w) = (w + \delta_w) 1 = w$

$$N_r(w_1 w_2) = (w_1 + \delta_{w_1}) w_2 = w_1 w_2 + \langle w_1 w_2 \rangle$$

$$N_r(w_1 w_2 w_3) = (w_1 + \delta_{w_1}) (w_2 w_3 + \langle w_2 w_3 \rangle)$$

$$= w_1 w_2 w_3 + \langle w_2 w_3 \rangle w_1 + \delta_{w_1} (w_2 w_3)$$

$$= w_1 w_2 w_3 + \langle w_2 w_3 \rangle w_1 + \langle w_1 w_2 \rangle w_3 - \langle w_1 w_3 \rangle w_2 //$$

### 期待値

$a \in A(W)$  に対して  $N_r(a)$  の定数項 ( $\Lambda(W) = \mathbb{C} \oplus W \oplus \Lambda^2(W) \oplus \cdots$  である事に注意) を期待値といい  $\langle a \rangle$  と書く。 $w$  と  $w'$  ( $w, w' \in W$ ) の  $A(W)$  における積  $ww'$  の期待値は、始めに与えた bilinear form の値  $\langle ww' \rangle$  に等しい。

—例—

$$\begin{aligned} \langle w_1 w_2 w_3 w_4 \rangle &= \langle w_1 w_2 \rangle \langle w_3 w_4 \rangle - \langle w_1 w_3 \rangle \langle w_2 w_4 \rangle \\ &\quad + \langle w_1 w_4 \rangle \langle w_2 w_3 \rangle \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{Nr}(g_1) &= w_1 w_2, \quad \text{Nr}(g_2) = w_3 w_4 \text{ の時} \\ \langle g_1 g_2 \rangle &= \langle (w_1 w_2 - \langle w_1 w_2 \rangle)(w_3 w_4 - \langle w_3 w_4 \rangle) \rangle \\ &= \langle w_1 w_3 \rangle \langle w_2 w_4 \rangle + \langle w_1 w_4 \rangle \langle w_2 w_3 \rangle \end{aligned}$$

このように、オペレーターのノルムを、 $W$  の元を使って表わしておけば、積の期待値は 2 個ずつの積の期待値の適当な積の和になる。後に、もっと一般的な場合の公式を示す。//

### $T_g$ から $\text{Nr}(g)$ を求める公式

$g \in A(W)$  が  $G(W)$  のザリスキ閉包に含まれるための必要十分条件は  $\text{Nr}(g)$  が次の形をしている事である。

$$\begin{aligned} \text{Nr}(g) &= c w_1 \cdots w_k \exp(\rho/2) \\ c &\in \mathbb{C}, w_1, \dots, w_k \in W, \rho \in \Lambda^2(W) \end{aligned}$$

$k=0$  の場合に、 $T_g$  から  $\rho$  を求める公式を与えよう。 $W$  の基底を  $v_1, \dots, v_N$  とする。内積、及び期待値の表を

$$J = (\langle v_j, v_k \rangle)_{j,k=1, \dots, N}$$

$$K = (\langle v_j v_k \rangle)_{j,k=1, \dots, N}$$

とする。  $K + {}^t K = J$  である。



直交変換  $T_g$  の行列表示を  $T$  とする。すなわち

$$(g v_1, \dots, g v_N) = (v_1 g, \dots, v_N g) T$$

ここで  $k = \text{偶数 (奇数)}$  の時  $E(g) = g$  ( $-g$ ) となる事に注意。

$$A^2(W) \text{ の元 } P \text{ を } P = \sum_{j,k=1}^N R_{jk} v_j v_k \text{ とする。}$$

$$\boxed{\text{公式 I}} \quad R(TK + K) = T - I$$

積の公式

$Nr(g_1), \dots, Nr(g_n)$  から  $Nr(g_1 \dots g_n)$  を求める公式を挙げる。

$$\boxed{\text{公式 II}} \quad Nr(g) = w_1 \dots w_k \exp(P/2), \quad w = \sum_{j=1}^N v_j g_j$$

$$\Rightarrow Nr(wg) = \left( \sum_{j=1}^k (-)^{j-1} w_1 \dots w_{j-1} \langle w w_j \rangle w_{j+1} \dots w_k + w^{(1)} w_1 \dots w_k \right) \exp(P/2)$$

$$\text{但し } w^{(1)} = \sum_{j,k=1}^N v_j (1 - R^{TK})_{jk} c_k$$

$$\boxed{\text{公式 III}} \quad Nr(g_\mu) = \exp(P^{(\mu)}/2), \quad P^{(\mu)} = \sum_{j,k=1}^N R_{jk}^{(\mu)} v_j v_k$$

$(\mu = 1, \dots, n)$

$$R = \begin{pmatrix} R^{(1)} & & \\ & \ddots & \\ & & R^{(n)} \end{pmatrix} \quad A = \begin{pmatrix} 0 & K & \cdots & K \\ -{}^t K & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \ddots & \ddots & K \\ -{}^t K & \cdots & -{}^t K & 0 \end{pmatrix}$$

$$\Rightarrow \langle g_1, \dots, g_n \rangle = (\det(1-AR))^{\frac{1}{2}}$$

$\langle g_1, \dots, g_n \rangle \neq 0$  ならば

$$Nr(g_1, \dots, g_n) = \langle g_1, \dots, g_n \rangle \exp(\hat{P}/2)$$

$$\hat{P} = \sum_{j,k=1}^n \hat{R}_{jk} v_j v_k, \quad \hat{R} = \sum_{j,k=1}^n (1-RA)^{-1} R$$

公式 III の最後の  $\sum$  の意味は、 $(1-RA)^{-1}R$  の  $n^2$  個の block の和を取れという事である。実は、次のように拡張して考えた方が自然である。

$W^{(\nu)}$  ( $\nu=1, \dots, n$ ) を  $W$  の  $n$  個の copy とし、 $w \in W$  を  $W^{(\nu)}$  の元と考えた時  $w^{(\nu)}$  と書く。直和  $\hat{W} = W^{(1)} \oplus \dots \oplus W^{(n)}$  に内積を

$$\langle w_1^{(\mu)}, w_2^{(\nu)} \rangle_{\Lambda} = \lambda_{\mu\nu} \langle w_1, w_2 \rangle$$

と定義する。ここで  $\Lambda = (\lambda_{\mu\nu})_{\mu, \nu=1, \dots, n}$  は  $n \times n$  対称行列で  $\lambda_{\mu\mu} = 1$  とする。すなわち  $\Lambda$  をパラメータとする  $n$  倍の大きな空間を考える。  $g_{\nu} \in G(W)$  を  $g_{\nu} \in G(W^{(\nu)})$  と考えて、その上で積  $g_1 \dots g_n$  を考える。この時、結果は

公式 III'

$$A(\lambda) = \begin{pmatrix} 0 & \lambda_{12}K & \dots & \lambda_{1n}K \\ -\lambda_{21}^t K & \dots & \dots & \vdots \\ \vdots & \dots & \dots & \lambda_{n-1,n}K \\ -\lambda_{n1}^t K & \dots & -\lambda_{n,n-1}^t K & 0 \end{pmatrix}$$

$$\langle g_1, \dots, g_n \rangle_\lambda = (\det(1 - A(\lambda)R))^{1/2}$$

$$\langle g_1, \dots, g_n \rangle_\lambda \neq 0 \text{ ならば}$$

$$Nr_\lambda(g_1, \dots, g_n) = \langle g_1, \dots, g_n \rangle_\lambda \exp(\hat{p}(\lambda)/2)$$

$$\hat{p}(\lambda) = \sum_{\mu, \nu=1}^n \sum_{j, k=1}^N \hat{R}_{\mu\nu, jk} v_j^{(\mu)} v_k^{(\nu)}$$

$$\hat{R} = (1 - RA(\lambda))^{-1} R$$

但し  $\langle w_1^{(\mu)} w_2^{(\nu)} \rangle_\lambda = \lambda_{\mu\nu} \langle w_1 w_2 \rangle$  とし,  $Nr_\lambda$  は対応する 1/IL4 写像とする,  $\lambda_{\mu\nu} = 1$  ( $\mu, \nu = 1, \dots, n$ ) とすれば, 公式 III になる。

### §3 1次元理論

基底ベクトル  $v_1, \dots, v_N$  に対応するものとして  
 $\psi^{(j)}(x) \quad j=1, \dots, m \quad x \in \mathbb{R}^1$   
 を考える。内積と 1/IL4 を決める bilinear form を次のように与える。

$$J: \langle \psi^{(j)}(x), \psi^{(k)}(x') \rangle = \delta_{jk} \delta(x-x')$$

$$K: \langle \psi^{(j)}(x), \psi^{(k)}(x') \rangle = \delta_{jk} \frac{1}{2\pi} \frac{i}{x-x'+i0}$$

$${}^tK: \langle \psi^{(k)}(x') \psi^{(j)}(x) \rangle = \delta_{jk} \frac{1}{2\pi} \frac{-i}{x-x'-i0}$$

$L$  を  $m \times m$  反対称行列とし  $M = e^{2\pi i L}$  とおく。この時  ${}^tM M = 1$  となる。次のような交換関係を満たすオペレーター  $\varphi(a; L)$  ( $a \in \mathbb{R}^1$ ) を作る。

$$\begin{aligned} & (\varphi(a) \psi^{(1)}(x), \dots, \varphi(a) \psi^{(n)}(x)) \\ &= \begin{cases} (\psi^{(1)}(x) \varphi(a), \dots, \psi^{(n)}(x) \varphi(a)) & x > a \\ (\psi^{(1)}(x) \varphi(a), \dots, \psi^{(n)}(x) \varphi(a)) M & x < a \end{cases} \end{aligned}$$

$$\text{答は } N_r(\varphi(a; L)) = \exp(P(a; L)/2)$$

$$P(a; L) = \sum_{j,k=1}^m \iint dx dx' R_{jk}(x-a, x'-a; L) \psi^{(j)}(x) \psi^{(k)}(x')$$

$$R(x, x'; L) = ((x+i0)^L - (x-i0)^L) (K(x, x') (x'-i0)^{-L} + {}^tK(x, x') (x'+i0)^{-L})$$

$$= ((x+i0)^L K(x, x') + (x-i0)^L {}^tK(x, x')) ((x'-i0)^{-L} - (x'+i0)^{-L})$$

$$= x_-^L (K(x, x') (M-1) + {}^tK(x, x') (I-M^{-1})) x'_-^{-L}$$

$$\text{但し } x_- = \begin{cases} 0 & x > 0 \\ |x| & x < 0 \end{cases} \text{ である。}$$

但し  $K(x, x') = \frac{1}{2\pi} \frac{i}{x - x' + i0}$ ,  ${}^t K(x, x') = \frac{1}{2\pi} \frac{-i}{x - x' - i0}$   
 であり, これらは, 積分変換の核として見ると, それぞれ  
 上半平面, 下半平面での正則函数の境界値への射影作用素  
 となる。例えば,  $L^2(\mathbb{R}')$  で考えれば, Hilbert 変換の  
 有界性から, これらも有界作用素となる。

証明  $Y_{\pm} = (x \pm i0)^{-L}$  とおくと

$Y_- = Y_+ T$ ,  $R = (Y_+^{-1} - Y_-^{-1})(KY_- + {}^t K Y_+)$   
 上の注意から  ${}^t K Y_+^{\pm 1} K = 0$ ,  $K Y_-^{\pm 1} {}^t K = 0$  であ  
 る。よって

$$\begin{aligned} R({}^t K T + K) &= (Y_+^{-1} - Y_-^{-1})(KY_- + {}^t K Y_+)({}^t K T + K) \\ &= (Y_+^{-1} - Y_-^{-1})(KY_- K + {}^t K Y_+ {}^t K T) \\ &= (Y_+^{-1} - Y_-^{-1})(KY_- + {}^t K Y_+ T) \\ &= (Y_+^{-1} - Y_-^{-1}) Y_- \\ &= T - I \quad // \end{aligned}$$

$M$ を与えても, 上記の交換関係を満たすようなオペ  
 $L$ -ターは *unique* ではなく,  $e^{2\pi i L} = M$  とな  
 る  $L$ の取り方だけの任意性がある事を注意しておく。(  $M$   
 を直交行列,  $L$ を反対称行列としたのは, 説明の簡易化のため  
 であって §4でもわかるように, この制限は不要である。)

### (#0) オペレーター表示

(#1) の解が, オペレーターの積の期待値によって構成できる事を示そう。  $a_1, \dots, a_n$  は実軸上に  $a_1 < \dots < a_n$  の順で並んでいるとする。

$$Y_+(x_0, x; a_1, \dots, a_n)_{jk} = \frac{-2\pi i(x_0 - x) \langle \psi^{(j)}(x_0) \psi^{(k)}(x) \varphi(a_1; L_1) \dots \varphi(a_n; L_n) \rangle}{\langle \varphi(a_1; L_1) \dots \varphi(a_n; L_n) \rangle}$$

$$Y_-(x_0, x; a_1, \dots, a_n)_{jk} = \frac{-2\pi i(x_0 - x) \langle \psi^{(j)}(x_0) \varphi(a_1; L_1) \dots \varphi(a_n; L_n) \psi^{(k)}(x) \rangle}{\langle \varphi(a_1; L_1) \dots \varphi(a_n; L_n) \rangle}$$

を考えよう。

$\psi^{(j)}(x_0)$ ,  $\psi^{(k)}(x)$ ,  $\varphi(a_\nu; L_\nu)$  などは  $x_0, x, a_1, \dots, a_n$  が実でないという意味を持たないが, 期待値を取って得られる函数は解析接続して考えてよい。

まず主として  $x$  についての解析接続を考える事として

$Y_\pm(x) = (Y_\pm(x_0, x; a_1, \dots, a_n)_{jk})_{j,k=1, \dots, m}$  と書こう。

$Y_\pm(x)$  は  $\text{Im } x \geq 0$  で正則

#### 証明

$Y_+(x)$  の  $x$  は, P8 で注意したように,  $\psi^{(j)}(x_0)$  と  $\psi^{(k)}(x)$  の積の期待値, あるいは  $\psi^{(k)}(x)$  と  $\varphi(a_\nu; L_\nu)$  を構成する  $\psi^{(l)}(x')$  との積の期待値, という形で含まれる。

$\langle \psi^{(j)}(x_0) \psi^{(k)}(x) \rangle = \delta_{jk} \frac{1}{2\pi} \frac{i}{x_0 - x + i0}$  の特異性は、  
 $x_0 - x$  をかけて消してある。  $\langle \psi^{(k)}(x) \psi^{(l)}(x') \rangle =$   
 $\delta_{kl} \frac{1}{2\pi} \frac{i}{x - x' + i0}$  の特異性は  $\text{Im } x > 0$  には存在し  
 ない。よって  $Y_+(x)$  は  $\text{Im } x > 0$  で正則。  $Y_-(x)$  も同様  
 である。//

さて、 $x > a_n$  とすると P12 の交換関係から、  
 $\psi^{(k)}(x) \varphi(a_1; L_1) \dots \varphi(a_n; L_n) = \varphi(a_1; L_1) \dots \varphi(a_n; L_n) \psi^{(k)}(x)$   
 よって特に  $Y_+(x) = Y_-(x)$  である。これから  $Y_{\pm}(x)$  によ  
 り  $\mathbb{C} - (-\infty, a_n)$  で正則な関数が定義される事がわかる。  
 さらに、 $a_1, \dots, a_n$  で区切られた各 branch cut の上で  
 P12 の交換関係を使って、 $Y_{\pm}(x)$  の値を比べると

$$\begin{array}{ccccccc}
 Y_+ M_1 \dots M_n = Y_- & & & Y_+ M_{n-1} M_n = Y_- & & Y_+ M_n = Y_- & & Y_+ = Y_- \\
 \hline
 a_1 & & a_2 & \dots & a_{n-2} & & a_{n-1} & & a_n
 \end{array}$$

となる。これから  $Y(x)$  が期待されたモノドロミー性質

$$Y_{\nu} Y(x) = Y(x) M_{\nu} \quad (\nu = 1, \dots, n)$$

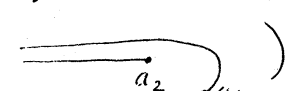
を持つ事がわかる。

公式 II, III を適用して精密な議論<sup>論</sup>をしてみよう。まず  
 公式 III で  $R^{(\nu)}$  として  $(R(x-a, x'-a; L_{\nu}))_{jk}$   $x, x' \in \mathbb{R}'$   
 $j, k = 1, \dots, m$

を取った時  $(I-RA)^{-1}$  が  $L^2$  の有界作用素として意味づけられる事を示す。但し, 仮定として,  $L_\nu$  は skew-hermitian で充分 0 に近いとする。

$a_1, \dots, a_n$  を  $\text{Im } a_1 > \dots > \text{Im } a_n$  と取る。<sup>\*</sup>

半直線  $\{x \mid \text{Im}(x-a) = 0, \text{Re}(x-a) < 0\}$  上の  $L^2$  函数全体の作る Hilbert space を  $H_\nu$  とする。

Fourier 変換して容易にわかるように  $\frac{1}{2\pi} \frac{\pm i}{x-x' \pm i0}$  は  $H_\nu \longrightarrow H_\mu$  の作用素の核と考へて, 有界な作用素を定義する。一方  $L_\nu$  を skew-hermitian と仮定したから掛け算作用素として  $(x-a_\nu)_-^{\pm L_\nu}$  も有界である。従つて  $R$  および  $A$  は 直和  $\bigoplus_{\nu=1}^n H_\nu$  における有界作用素となる。さらに  $L_\nu$  が 0 に近い時, P12 の最後の式から明らかになつたように,  $R$  の作用素ノルムは小さい。よつて  $(I-RA)^{-1}$  は  $\bigoplus_{\nu=1}^n H_\nu$  における有界作用素となる。( \* この仮定は, 積分路を引, 張りつ  $a_1, \dots, a_n$  を動かせば, 不要である。例  )

次に  $((I-RA)^{-1} - I)_{\mu\nu} : H_\nu \longrightarrow H_\mu$  の核函数が  $H_\nu$  の変数について,  $a_\nu$  で正則である事を示す。すなわち

$$R_\mu A_{\mu\nu}(x_1, x_2) + \sum_{\kappa, \lambda=1}^n \iint dx dx' R_\mu A_{\mu\kappa}(x_1, x) (I-RA)^{-1}_{\kappa\lambda}(x, x') R_\lambda A_{\lambda\nu}(x', x_2)$$

を考える。第 1 項は,  ${}^t K Y_+^{\pm 1} K = 0, K Y_-^{\pm 1} {}^t K = 0$  故



$\mu < \nu$  ならば

$$R_\mu K(x_1, x_2) = ((x_1 - a_\mu + i0)^L - (x_1 - a_\mu - i0)^L) K(x_1, x_2) (x_2 - a_\mu - i0)^{-L}$$

$\mu = \nu$  ならば 0

$\mu > \nu$  ならば

$$-R_\mu {}^t K(x_1, x_2) = -((x_1 - a_\mu + i0)^L - (x_1 - a_\mu - i0)^L) {}^t K(x_1, x_2) (x_2 - a_\mu + i0)^{-L}$$

となり、いずれも  $x_2 = a_\nu$  で正則である。

また  $R_\mu A_{\mu\nu}(x_1, x)$  は  $x$  を変数として  $H_\nu$  に、  
 $R_\lambda A_{\lambda\nu}(x', x_2)$  は  $x'$  を変数として  $H_\lambda$  に属する。この  
 事は  $x_2 = a_\nu$  としても正しい。よって第2項も  $x_2 = a_\nu$   
 で正則となる。

次に 公式 II を適用して  $\frac{\langle \psi^{(j)}(x_0) \psi^{(k)}(x) \varphi(a_1; L_1) \cdots \varphi(a_n; L_n) \rangle}{\langle \varphi(a_1; L_1) \cdots \varphi(a_n; L_n) \rangle}$   
 を計算すると

$$\left( K - \sum_{\mu, \nu=1}^n K(1-RA)_{\mu\nu}^{-1} R_\nu {}^t K \right) (x_0, x)$$

を得る。このうち第2項については、上と同じ論法で有限な  
 値を得る。これから直ちに、 $Y(x_0, x_0; a_1, \dots, a_n) = 1$  が  
 わかる。

$(1-RA)_{\mu\nu}^{-1}(x_1, x_2)$  が  $x_2 = a_\nu$  で正則な事から、 $x_2$  に  
 ついての積分路を  $a_\nu$  のまわりで変化させて計算すると

$$-K(1-RA)_{\mu\nu}^{-1} R_\nu {}^t K(x_0, x)$$

$$\begin{aligned}
 &= -\iint dx_1 dx_2 K(x_0, x_1) (1-RA)_{\mu\nu}^{-1}(x_1, x_2) (x_2 - a_\nu + i0)^{-L_\nu} \not\pm K(x_2, x) (x - a_\nu + i0)^{-L_\nu} \\
 &\quad + \iint dx_1 dx_2 K(x_0, x_1) (1-RA)_{\mu\nu}^{-1}(x_1, x_2) (x_2 - a_\nu - i0)^{-L_\nu} \not\pm K(x_2, x) (x - a_\nu + i0)^{-L_\nu} \\
 &= \left\{ \iint dx_1 dx_2 K(x_0, x_1) (1-RA)_{\mu\nu}^{-1}(x_1, x_2) \right. \\
 &\quad \times \left. \left( (x_2 - a_\nu + i0)^{-L_\nu} K(x_2, x) + (x_2 - a_\nu - i0)^{-L_\nu} \not\pm K(x_2, x) \right) \right\} (x - a_\nu + i0)^{-L_\nu} \\
 &\quad - \int dx_1 K(x_0, x_1) (1-RA)_{\mu\nu}^{-1}(x_1, x) \quad (\text{下の図参照})^*
 \end{aligned}$$

ここで\*1項の { } の中は  $x = a_\nu$  で正則, \*2項も  $x = a_\nu$  で正則となる。以上から  $Y(x_0, x; a_1, \dots, a_n)$  の  $x = a_\nu$  における特異部分は

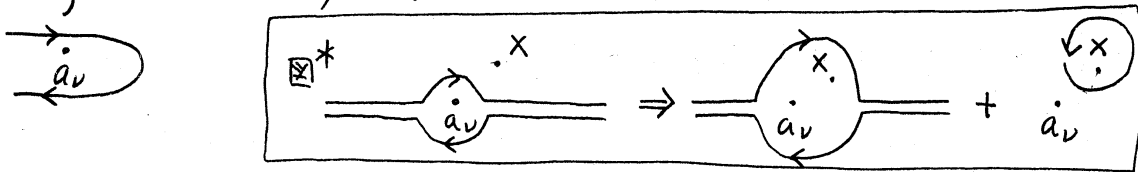
$$\Phi_\nu(x_0, x; a_1, \dots, a_n) (x - a_\nu + i0)^{-L_\nu}$$

となる。但し

$$\Phi_\nu(x_0, x; a_1, \dots, a_n) = -2\pi i (x_0 - x) \sum_{\mu=1}^n \iint dx_1 dx_2 K(x_0, x_1) (1-RA)_{\mu\nu}^{-1}(x_1, x_2) \left\{ (x_2 - a_\nu + i0)^{-L_\nu} K(x_2, x) + (x_2 - a_\nu - i0)^{-L_\nu} \not\pm K(x_2, x) \right\}$$

となる。特に

$$\Phi_\nu(x_0, a_\nu; a_1, \dots, a_n) = (x_0 - a_\nu) \sum_{\mu=1}^n \int dx_1 K(x_0, x_1) \times \int dx_2 (1-RA)_{\mu\nu}^{-1}(x_1, x_2) (x_2 - a_\nu)^{-L_\nu - 1}$$



注意 以上の計算では,  $x$  の変域を  $\mathbb{C}$  から branch cuts  $\bigcup_{\nu=1}^n \{x \mid \text{Im}(x - a_\nu) = 0, \text{Re}(x - a_\nu) < 0\}$  を除いた領域としている。  $x$  の変域がこの領域の時は,  $x_1$  をいずれかの cut 上の積分変数として,  $K(x_1, x)$  と  $\not\pm K(x_1, x)$  は同一視して

構わない。

次に  $Y(x_0, x; a_1, \dots, a_n)$  の  $x = a_\nu$  における正則部分が全体として消し合う事を見ておこう。

$$\begin{aligned}
 & - \sum_{\kappa=1}^n K(1-RA)^{-1}_{\mu\kappa} R_\kappa {}^t K \text{ の正則部分は} \\
 & - \sum_{\kappa \neq \nu} K(1-RA)^{-1}_{\mu\kappa} R_\kappa {}^t K - K(1-RA)^{-1}_{\mu\nu} \\
 & = - \sum_{\kappa \neq \nu} K(1-RA)^{-1}_{\mu\kappa} R_\kappa {}^t K - K\delta_{\mu\nu} - \sum_{\kappa \neq \nu} K(1-RA)^{-1}_{\mu\kappa} R_\kappa A_{\kappa\nu}
 \end{aligned}$$

ここで上の注意により  ${}^t K + A_{\kappa\nu} = 0$  となるから

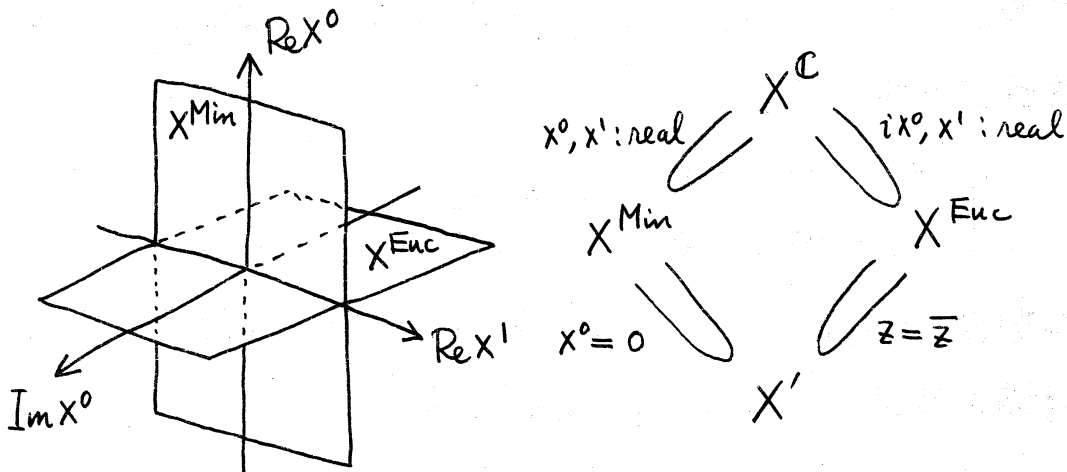
$$\begin{aligned}
 & K - \sum_{\mu, \kappa=1}^n K(1-RA)^{-1}_{\mu\kappa} R_\kappa {}^t K \text{ の正則部分は} \\
 & K - \sum_{\mu=1}^n K\delta_{\mu\nu} = 0 \text{ となる。}
 \end{aligned}$$

以上で (井) で要求した性質の主要部分を検証した。実は、 $L_\infty$  が、 $e^{2\pi i l_1} \dots e^{2\pi i l_n} e^{2\pi i L_\infty} = 1$  から unique に決まる、0に近い行列 (これは skew-hermitian とは限らない) になって、i) ~ iii) のすべてが満たされるのであるが、その証明は省略する。

#### §4 2次元理論

$X^{\mathbb{C}} = \{(x^0, x^1) \mid x^0, x^1 \in \mathbb{C}\}$  を複素2次元平面とする。  $X^{\mathbb{C}}$  の中の  $\text{Re } x^0$  と  $\text{Re } x^1$  で張られた実2次元平面を、 $X^{\text{Min}}$  (2次元ミンコフスキー空間) と書き、その上の座標

としては  $X^\pm = (x^0 \pm x^1)/2$  を使う。  $X^{\mathbb{C}}$  の中の  $\text{Im} x^0$  と  $\text{Im} x^1$  で張られた実 2次元平面を  $X^{\text{Euc}}$  (2次元ユークリッド空間) と書き, その上の座標としては  $z = -x^-$ ,  $\bar{z} = x^+$  を使う。  $X' = X^{\text{Min}} \cap X^{\text{Euc}}$  と書こう。



$m$  を正の定数として, 2次元ディラック方程式

$$\begin{pmatrix} m & \partial_- \\ -\partial_+ & m \end{pmatrix} \begin{pmatrix} w_+(x) \\ w_-(x) \end{pmatrix} = 0 \quad (\text{但し } \partial_\pm = \frac{\partial}{\partial x^\pm})$$

を考えよう。解を Fourier 表示すれば,

$$w_\pm(x) = \int du \sqrt{|u|}^{\pm 1} e^{-im(x^-u + x^+u^{-1})} w(u)$$

となる。ここで  $u \in \text{GL}(1, \mathbb{R})$ ,  $du = du/2\pi|u|$  で

ある。また  $\sqrt{|u|}^{\pm 1} = \begin{cases} e^{\pm \frac{\pi}{4}i} |u|^{\pm \frac{1}{2}} & (u > 0) \\ e^{\mp \frac{\pi}{4}i} |u|^{\pm \frac{1}{2}} & (u < 0) \end{cases}$  である。

さて, 基底ベクトルとして  $(\psi(u))_{u \in \text{GL}(1, \mathbb{R})}$  を取り, 内積と期待値の表を次のようにする。

$$\langle \psi(u), \psi(u') \rangle = 2\pi |u| \delta(u+u')$$

$$\langle \psi(u)\psi(u') \rangle = 2\pi u_+ \delta(u+u')$$

次に

$$\psi_{\pm}(x) = \int du \sqrt{|0+i u|}^{\pm 1} e^{-i m(x-u+x+u')} \psi(u)$$

を考えると,  $(\psi_{\pm}(x))_{x \in X^{Min}}$  は独立ではなく, ディラック方程式を満たす。

$$\begin{pmatrix} m & \partial_- \\ -\partial_+ & m \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \psi_+(x) \\ \psi_-(x) \end{pmatrix} = 0$$

初期値  $(\psi_{\pm}(x))_{x \in X'}$  が, 基底ベクトルとなる。内積と期待値の表は  $(\psi_{\pm}(x))_{x \in X^{Min}}$  に対して

$$\begin{pmatrix} \langle \psi_+(x), \psi_+(x') \rangle & \langle \psi_+(x), \psi_-(x') \rangle \\ \langle \psi_-(x), \psi_+(x') \rangle & \langle \psi_-(x), \psi_-(x') \rangle \end{pmatrix} = \frac{2}{m} D(x-x'; m)$$

$$\text{但し } \begin{pmatrix} m & \partial_- \\ -\partial_+ & m \end{pmatrix} D(x; m) = 0, \quad D(0, x'; m) = \begin{pmatrix} \delta(x') \\ \delta(x') \end{pmatrix}$$

$$\begin{pmatrix} \langle \psi_+(x) \psi_+(x') \rangle & \langle \psi_+(x) \psi_-(x') \rangle \\ \langle \psi_-(x) \psi_+(x') \rangle & \langle \psi_-(x) \psi_-(x') \rangle \end{pmatrix}$$

$$= \frac{i}{m\pi} \begin{pmatrix} \partial_- & m \\ -m & \partial_+ \end{pmatrix} K_0(2m\sqrt{(x^+-x'^+-i0)(-x^-+x'^-+i0)})$$

となる。

理論の適用範囲を広げるために次のようにする。 $\mathbb{C}^2$ の基底  $e, e^*$  を取り内積を

$$\begin{pmatrix} \langle e, e \rangle & \langle e, e^* \rangle \\ \langle e^*, e \rangle & \langle e^*, e^* \rangle \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} \text{ と定義する。上で}$$

定義した  $(\psi(u))_{u \in GL(1, \mathbb{R})}$  あるいは  $(\psi_{\pm}(x))_{x \in X^{Min}}$  の張るベクトル空間と  $\mathbb{C}^2$  とのテンソル積を考え、そこにおけるベクトルを次のように表わす。

$$\psi(u) \otimes e \longrightarrow \psi(u)$$

$$\psi(u) \otimes e^* \longrightarrow \psi^*(u)$$

$$\psi_{\pm}(x) \otimes e \longrightarrow \psi_{\pm}(x)$$

$$\psi_{\pm}(x) \otimes e^* \longrightarrow \psi_{\pm}^*(x)$$

これらのベクトルの間の内積, 期待値は次のように計算 (定義) される。

$$\begin{aligned} \langle \psi(u), \psi^*(u') \rangle &= \langle \psi(u) \otimes e, \psi(u') \otimes e^* \rangle \\ &= \langle \psi(u), \psi(u') \rangle \langle e, e^* \rangle \\ &= 2\pi |u| \delta(u+u') \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \langle \psi(u) \psi^*(u') \rangle &= \langle (\psi(u) \otimes e)(\psi(u') \otimes e^*) \rangle \\ &= \langle \psi(u) \psi(u') \rangle \langle e, e^* \rangle \\ &= 2\pi u_+ \delta(u+u') \end{aligned}$$

etc.

次のような交換関係を満たすオペレーター  $\varphi_F(a; l)$  を構成しよう。 ( $l \in \mathbb{C} - \mathbb{Z}$ )

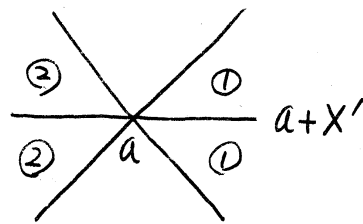
$$\varphi_F(a; l) \psi_{\pm}(x) = \begin{cases} \psi_{\pm}(x) \varphi_F(a; l) & x^+ > a^+, x^- < a^- \\ e^{2\pi i l} \psi_{\pm}(x) \varphi_F(a; l) & x^+ < a^+, x^- > a^- \end{cases}$$

$$\varphi_F(a; l) \psi_{\pm}^*(x) = \begin{cases} \psi_{\pm}^*(x) \varphi_F(a; l) & x^+ > a^+, x^- < a^- \\ e^{-2\pi i l} \psi_{\pm}^*(x) \varphi_F(a; l) & x^+ < a^+, x^- > a^- \end{cases}$$

これは言い換えると、基底ベクトル  $(\psi_{\pm}(x), \psi_{\pm}^*(x))_{x \in a+X'}$  を  $a$  の右側で  $\begin{pmatrix} 1 & \\ & 1 \end{pmatrix}$   $a$  の左側で  $\begin{pmatrix} e^{2\pi i l} & \\ & e^{-2\pi i l} \end{pmatrix}$  と

直交回転する事に当たる。

$X^{\text{Min}}$



$$\textcircled{1} \iff x^+ > a^+, x^- < a^-$$

$$\textcircled{2} \iff x^+ < a^+, x^- > a^-$$

この時 ① および ② の領域における交換関係は、 $\psi_{\pm}(x)$  がディラック方程式を満たす事から上の形に決まってしまう。

(波動方程式の初期値の影響領域)

注意  $\psi_{\pm}(x)$  と  $\psi_{\pm}^*(x)$  の両方を導入した理由は、上の交換関係が内積を不変にする変換を定義するようにしたからであり、 $l = \frac{1}{2}$  の時は、 $\psi_{\pm}(x)$  だけで理論を展開する事ができる。オンサーガー理論 [2] から出発した場合にはそのようなオペレーターが得られ、それがそもそもの我々の出発点であった。

$\mathcal{Q}_F(a; l)$  のノルムは次のようになる。

$$\text{Nr}(\mathcal{Q}_F(a; l)) = \exp(P(a; l)/2)$$

$$P(a; l) = \iint \underline{du} \underline{du}' \left[ R_l(u, u') \psi(u) \psi^*(u') + R_{-l}(u, u') \psi^*(u) \psi(u') \right] e^{-im(a^-(u+u') + a^+(u^{-1}+u'^{-1}))}$$

$$\text{但し } R_l(u, u') = 2 \sin \pi l \left( \frac{u-i0}{u'-i0} \right)^{-l} \frac{i}{u+u'-i0} \sqrt{u-i0} \sqrt{u'-i0}$$

これは次の手順で得られる。1次元理論で

$$\psi(u) = \int dx \sqrt{0-iu} e^{-ixu} \psi(x) \quad \text{と定義すると}$$

$(\psi(u))_{u \in \text{GL}(1, \mathbb{R})}$  は P21 の始めに書かれた交換関係を満たす。この  $\psi(u)$  を使って P12 の  $P(a; L)$  (但し  $m=1, L=l$ ) を表わすと、初等的な Fourier 変換の計算により

$$P(a; l) = \iint \underline{du} \underline{du}' 2 \sin \pi l \left( \frac{u-i0}{u'-i0} \right)^{-l} \frac{i}{u+u'-i0} \times \sqrt{u-i0} \sqrt{u'-i0} e^{ia(u+u')} \psi(u) \psi(u')$$

を得る。これを修正して上の式が得られる。こうして得られたオペレーターが、P23 の交換関係を満たす事は、公式 II を使って検証できるが、詳細は略す。

ディラック方程式の解で、与えられた大域的モ/ドロミーを持つものを作ろう。但し、(#<sub>2</sub>) や (#<sub>3</sub>) に対応する理論



が作れる場合に限定する。

公式 III'

P10におけるように、パラメータ  $\lambda$  と  $n$  個の  
copy  $\psi^{(\nu)}, \psi^{(\nu)*}$  ( $\nu=1, \dots, n$ ) を用意し、 $\varphi_F(a_\nu; l_\nu)$   
は  $\psi^{(\nu)}(a)$  と  $\psi^{*(\nu)}(a)$  とだけから構成されているとしよう。  
この時、 $\varphi_F(a_\nu; l_\nu)$  と  $\psi_{\pm}^{(\nu)}(x), \psi_{\pm}^{*(\nu)}(x)$  との交換関係は  
P23におけるそれと同じであるが、さらに

$$\varphi_F(a_\nu; l_\nu) (\psi_{\pm}^{(\mu)}(x) - \lambda_{\mu\nu} \psi_{\pm}^{(\nu)}(x)) = (\psi_{\pm}^{(\mu)}(x) - \lambda_{\mu\nu} \psi_{\pm}^{(\nu)}(x)) \varphi_F(a_\nu; l_\nu)$$

$$\varphi_F(a_\nu; l_\nu) (\psi_{\pm}^{*(\mu)}(x) - \lambda_{\mu\nu} \psi_{\pm}^{*(\nu)}(x)) = (\psi_{\pm}^{*(\mu)}(x) - \lambda_{\mu\nu} \psi_{\pm}^{*(\nu)}(x)) \varphi_F(a_\nu; l_\nu)$$

が成り立つ。

$z_0, z, a_1, \dots, a_n \in X'$  として

$$\langle \psi_{\varepsilon}^{*(\mu)}(z_0) \psi_{\varepsilon'}^{(\nu)}(z) \varphi_F(a_1; l_1) \dots \varphi_F(a_n; l_n) \rangle_1 \quad (\varepsilon, \varepsilon' = \pm)$$

を考え、これを  $z_0, z, a_1, \dots, a_n$  について  $X^{Euc}$  に解析接続すると、1次元理論と同様に多価関数を得る。公式 II を使

って計算すると、 $z_0 \sim a_\nu$  において

$$\left[ \begin{array}{l} \langle \psi_{+}^{*(\nu)}(z_0) \psi_{\varepsilon'}^{(\mu)}(z) \varphi_F(a_1; l_1) \dots \varphi_F(a_n; l_n) \rangle_1 \\ \langle \psi_{-}^{*(\nu)}(z_0) \psi_{\varepsilon'}^{(\mu)}(z) \varphi_F(a_1; l_1) \dots \varphi_F(a_n; l_n) \rangle_1 \end{array} \right]$$

$$= \sum_{j=0}^{\infty} C_{j, \varepsilon', \nu}^{(\mu)} w_{l_\mu + \frac{1}{2} + j} [a_\nu] + \sum_{j=0}^{\infty} C_{j, \varepsilon', \nu}^{*(\mu)} w_{-l_\mu + \frac{1}{2} + j}^* [a_\nu]$$

という展開を得る。但し

$$w_\ell[a] = \begin{pmatrix} e^{(\ell-\frac{1}{2})i\theta} I_{\ell-\frac{1}{2}}(mr) \\ e^{(\ell+\frac{1}{2})i\theta} I_{\ell+\frac{1}{2}}(mr) \end{pmatrix}, w_\ell^*[a] = \begin{pmatrix} e^{-(\ell+\frac{1}{2})i\theta} I_{\ell+\frac{1}{2}}(mr) \\ e^{-(\ell-\frac{1}{2})i\theta} I_{\ell-\frac{1}{2}}(mr) \end{pmatrix}$$

$(\frac{r}{2} e^{i\theta} = z_0 - a)$  である。

また  $C_{j,\varepsilon,\nu}^{(\mu)}$ ,  $C_{j,\varepsilon,\nu}^{*(\mu)}$  は  $(z; a_1, \dots, a_n)$  の係数であるが,  $\begin{pmatrix} C_{0,+,\nu}^{(\mu)} \\ C_{0,-,\nu}^{(\mu)} \end{pmatrix}$  を  $W_{F,\nu}^{(\mu)}(z; a_1, \dots, a_n; 1)$  あるいは

簡単に  $W_{F,\nu}^{(\mu)}(1)$  と書くと,  $W_{F,\nu}(1) = (W_{F,\nu}^{(1)}(1), \dots, W_{F,\nu}^{(n)}(1))$  は次の性質を満たす。

$$i) (\gamma_\mu W_{F,\nu}^{(1)}(1), \dots, \gamma_\mu W_{F,\nu}^{(n)}(1)) \\ = (W_{F,\nu}^{(1)}(1), \dots, W_{F,\nu}^{(n)}(1)) M_\mu$$

$$\text{但し } M_\mu = 1 + (e^{2\pi i l_\mu} - 1) E_\mu \Lambda, E_\mu = \begin{pmatrix} & & & \mu \\ & & & \uparrow \\ & & 0 & \\ & & & 1 \\ & & & & 0 \end{pmatrix}$$

$$ii) \begin{pmatrix} m & -\partial_z \\ -\partial_{\bar{z}} & m \end{pmatrix} W_{F,\nu}^{(\kappa)}(1) = 0 \quad (z \neq a_1, \dots, a_n)$$

iii)  $W_{F,\nu}^{(\kappa)}(1)$  を  $z \sim a_\mu$  で展開すると

$$W_{F,\nu}^{(\kappa)}(1) = \sum_{j=0}^{\infty} \lambda_{\kappa\mu} C_j^{(\mu)}(W_{F,\nu}(1)) w_{-\ell_\mu - \frac{1}{2} + j}[a_\mu] \\ + \sum_{j=0}^{\infty} \lambda_{\kappa\mu} C_j^{*(\mu)}(W_{F,\nu}(1)) w_{\ell_\mu + \frac{1}{2} + j}^*[a_\mu] \\ + \text{regular function}$$

iv)  $|W_{F,\nu}^{(\kappa)}(1)|$  は  $|z| \rightarrow \infty$  で指数減少

一般に  $i) \sim iv)$  を満たす  $w = (w^{(1)}, \dots, w^{(n)})$  の全体を  $W_{a_1, \dots, a_n}^{l_1 + \frac{1}{2}, \dots, l_n + \frac{1}{2}}(\Lambda)$  と書く。

同様に  $\langle \psi_{(x_0)}^{(\nu)} \psi_{(x)}^{*(\mu)} \varphi_F(a_i; -l_i) \dots \varphi_F(a_n; -l_n) \rangle$  の  $x_0 \sim a_\nu$  における展開の  $w_{l+\frac{1}{2}}^*[a_\nu]$  の係数を  $w_{F, \nu}^{*(\mu)}(\Lambda)$  と書くと、 $w_{F, \nu}^*(\Lambda) = (w_{F, \nu}^{*(1)}(\Lambda), \dots, w_{F, \nu}^{*(n)}(\Lambda))$  ( $\nu = 1, \dots, n$ ) も  $W_{a_1, \dots, a_n}^{l_1 + \frac{1}{2}, \dots, l_n + \frac{1}{2}}(\Lambda)$  に属する。

$w_{F, \nu}(\Lambda) (\nu = 1, \dots, n)$  と  $w_{F, \nu}^*(\Lambda) (\nu = 1, \dots, n)$  を iii) の形に展開した時の展開の係数の初めの項を見ると

$$C_0^{(\mu)}(w_{F, \nu}(\Lambda)) \begin{cases} \neq 0 & \mu = \nu \\ = 0 & \mu \neq \nu \end{cases} \quad C_0^{*(\mu)}(w_{F, \nu}(\Lambda)) \neq 0$$

$$C_0^{(\mu)}(w_{F, \nu}^*(\Lambda)) \neq 0 \quad C_0^{*(\mu)}(w_{F, \nu}^*(\Lambda)) \begin{cases} \neq 0 & \mu = \nu \\ = 0 & \mu \neq \nu \end{cases}$$

となっている。これから特に  $(w_{F, \nu}(\Lambda))_{\nu=1, \dots, n}$  あるいは  $(w_{F, \nu}^*(\Lambda))_{\nu=1, \dots, n}$  が一次独立な  $n$  個の組であることがわかる。

$l_1, \dots, l_n \in \mathbb{R} - \mathbb{Z}$ ,  $\Lambda$ : 実正值 と仮定すると  $\dim W_{a_1, \dots, a_n}^{l_1 + \frac{1}{2}, \dots, l_n + \frac{1}{2}}(\Lambda) = n$  である事が言える。実は  $w = (w^{(1)}, \dots, w^{(n)}) \in W_{a_1, \dots, a_n}^{l_1 + \frac{1}{2}, \dots, l_n + \frac{1}{2}}(\Lambda)$  について  $C_0^{(\nu)}(w) C_0^{*(\nu)}(w) = 0$  ( $\nu = 1, \dots, n$ ) ならば  $w = 0$  である事がいえる。この事を証明するには、まず

$W_{F,\nu}(1), W_{F,\nu}^*(1)$  による引き算で,  $-1 < l_1, \dots, l_n < 0$  の時に帰着させる。次にこの条件の満たされる時は次のようにする。  $w \in W_{a_1, \dots, a_n}^{l_1+\frac{1}{2}, \dots, l_n+\frac{1}{2}}(1)$  に対して

$$\sum_{\mu, \nu=1}^n (\Lambda^{-1})_{\mu\nu} (w_+^{(\mu)} \overline{w_+^{(\nu)}} + w_-^{(\mu)} \overline{w_-^{(\nu)}})$$

を考えると, これは  $\mathbb{C} - \{a_1, \dots, a_n\}$  で一価正値である。ディラック方程式を使って contour 積分に直す事により

$$\begin{aligned} 0 &\leq \frac{m^2}{2} \iint i dz d\bar{z} \sum_{\mu, \nu=1}^n (\Lambda^{-1})_{\mu\nu} (w_+^{(\mu)} \overline{w_+^{(\nu)}} + w_-^{(\mu)} \overline{w_-^{(\nu)}}) \\ &= \sum_{\nu=1}^n (\sin \pi l_\nu) C_0^{(\nu)}(w) \overline{C_0^{*(\nu)}(w)} \end{aligned}$$

を得る。よって  $C_0^{(\nu)}(w) \overline{C_0^{*(\nu)}(w)} = 0$  ( $\nu = 1, \dots, n$ ) ならば  $w = 0$  である。//

さて,  $\dim W_{a_1, \dots, a_n}^{l_1+\frac{1}{2}, \dots, l_n+\frac{1}{2}}(1) = n$  が言えると, 直ちに基底をたてに並べた  $\begin{bmatrix} W_{F,1} \\ \vdots \\ W_{F,n} \end{bmatrix}$  が, 線型 holonomic system を満たす事 (すなわち (#2) に当たる) および その方程式系の係数が, 可解条件として, 非線型の完全積分可能な全微分方程式系を満たす事 (すなわち (#3) に当たる) が従うのであるが, ここでは省略する。

## 参考文献

- [1] L. Schlesinger, J. Reine Angew. Math. 141  
96-145 (1912).
- [2] L. Onsager, Phys. Rev. 65, 117-149  
(1944)
- [3] M. Sato, T. Miwa, M. Jimbo, RIMS preprint  
207 (1976), Proc. Japan Acad. 53 A  
6-10, RIMS preprint 225, 234, 236, 238,  
239 (1977), 数理研講究録 295 (1977).
- なお、文中には引用しなか、たが、次の文献は、我々の研究  
の出発点のひとつであった。
- [4] T.T. Wu, B.M. McCoy, C.A. Tracy, E. Barouch,  
Phys. Rev. 13, 316-374 (1976)